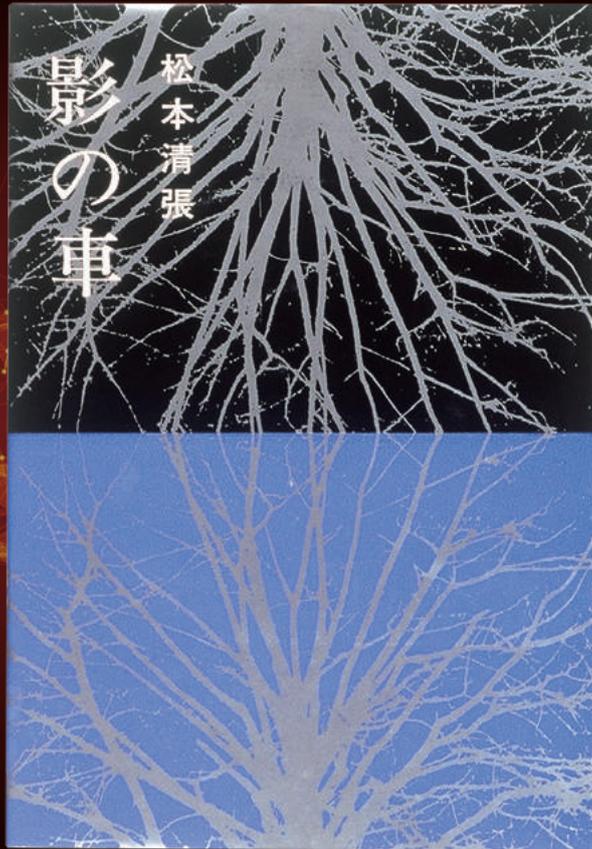


松本清張記念館

◆館報◆
2025.3
第75号

「なぜ、私が健一を怖れていたか」と云うのですか？

それは、私が曾つてそれをしたからです」



現在入手しやすい本
『影の車 松本清張プレミアム・ミステリー』 光文社文庫

「潜在光景」収録 影の車 昭和36（1961）年 中央公論社

作品介绍

浜島幸雄は仕事帰りのバスの中で二十年前ぶりに小磯泰子と再会した。家は近所だったが、当時それほど親しい間柄ではなかった。浜島は現在、妻と二人暮らしだが、温かみのない女性で家の中は索漠とした。会社つとめの味気無さにもやりきれなさを感じていた。泰子には亡くなった夫との間に六歳の健一がいる。生命保険の勧誘員をしていて暮らし向きは豊かではない。

浜島は気持ちがあたたかい泰子に魅かれ、彼女の家に密かに通うようになる。しかし、健一は人見知りで、一向に浜島に馴れない。

泰子の家へ通ううち、浜島は小さい頃のことを思い出すようになる。浜島も母子家庭で育ち、その頃、伯父がなにかと世話をやいてくれた。伯父は釣りが好きで、何度も幸雄を連れて行ってくれた。その伯父は突如死んでしまった。

泰子や健一との関係が続くうち、浜島は健一の「殺意らしいもの」を感じるようになる。幼い頃の記憶の「潜在光景」が浜島を破滅へと導いてしまう。

監督 野村芳太郎、脚本 橋本忍による映画が『影の車』のタイトルで一九七〇年に公開されている。

（企画係長 久富友嗣）

目次

開館26周年記念講演会	2
第48回研究発表会	6
西南女学院大学が最優秀賞受賞	10
渡邊淑子さん小倉西高等学校学生と懇談	12
記念館が漫画で紹介	13
友の会だより	14
トピックス	16

松本清張に挑んだ脚本家・橋本忍

講師：春日太一
(映画史研究者)

令和6年8月10日(土) 午後3時
男女共同参画センター・ムーブ
参加者261名

脚本とは何か

橋本忍は、2018年に100歳で亡くなられました。私は取材して『鬼の筆』という本を昨年、書かせていただきました。まず橋本忍という脚本家を語る上で基礎的な話をさせていただきます。脚本とは簡単に言うと設計図です。映画という立体の建物を作っていくための、文字で書かれている平面の設計図が脚本です。脚本に書いてあるのは、ト書きとセリフの二つだけです。ト書きとは場面の説明です。それ以外書いてはいけません。ですから、脚本家とは基本的には設計図を書く設計者なのです。

ビルと同じで、脚本家の多くは施工主、映画で言うと監督やプロデューサーから依頼を受けて脚本を書きます。しかし、橋本忍は毛色が違う人で、その企画が動いてないうちから興味があったら脚本を書いてしまうのです。プロデューサー等が、「何か面白いものないですか」と聞いてきたら、書いていたものを渡して企画が成立していく。橋本忍が書く



ものなら、とりあえず何でもいいよという時代がありました。

橋本忍の経歴

橋本忍の略歴をご説明しますと、国鉄の職員を経て1938年に徴兵され陸軍に入りますが、実際には戦場には行っていないです。徴兵されてすぐの健康診断で結核と診断をされ、岡山県の実験の陸軍療養所に隔離されたためです。その時に隣のベッドで寝ていた人が読んでいた映画雑誌の付録に脚本が書いてあったのです。橋本忍はそんなに映画に興味はなかったのですが、初めてその人から脚本を借りて読んだときに、これなら自分でも書けそうだったのです。それで、その人に、今日本で一番の脚本家は誰かと聞いたら伊丹万作との返答でした。伊丹十三のお父さんで、「無法松の一生」の脚本を書いた人ですね。そこで、伊丹万作に脚本を送って弟子になりますと宣言して、自分自身が体験した山の療養所での生活をドラマにして脚本に書き起こして伊丹万作に送りました。すると返事が来て細かい指摘が書いてあったのです。それで、嬉しくなつて伊丹万作に書いたものを何度も見せるようになり、戦争が終わり結核も治癒した後は、姫路でのサラリーマンのかたわら、大阪や京都への出張のついでに、必ず京都の伊丹万作の家に行つて脚本を添削してもらい指導を受けてきた。この段階ではサラリーマンで終わるつもりでいたのです。伊丹万作が亡くなると、伊丹万作の弟子である佐伯清という監督が代わりに脚本を見

てくださいるようになりました。その佐伯清監督が黒澤明と仲が良いと聞き、ぜひ僕の脚本を黒澤明に見せて欲しいとお願ひしました。佐伯清監督が橋本忍の脚本を黒澤明に渡したら、そのうち一本が「羅生門」という形で映画化されるわけです。黒澤明の映画でデビューして、しかもその映画がベネチア国際祭のグランプリを取り、アカデミー賞の名誉賞(現在の国際長編映画賞)まで取ってしまうのです。さらにその後も黒澤明と一緒に、「生きる」や「七人の侍」など、まさに黒澤明の全盛期の映画とともに作っていきました。当時の人からすると橋本忍はいきなり出てきましたからこの馬の骨か分からない。

多くの人が黒澤明のアシスタント的な人間だろうと橋本忍について思っていました。しかし、橋本忍は「羅生門」も「七人の侍」も自分で第一稿を書いているので原作者的なところがあるわけです。にもかかわらず、全部の栄光は黒澤明がもつていく。橋本忍のことを誰も注目してくれないので黒澤明から離れたという気持ちが強くなる。その後「生きもの」の記録「や」蜘蛛巣城」で一緒にやっていますが、自分独自の道を歩みたいということで、「一人の脚本家として」「私は貝になりたい」「切腹」「上意討ち」「日本の一番長い日」「人斬り」「風林火山」「日本沈没」「八甲田山」「八つ墓村」といった戦後の映画史を代表するようなヒット作や名作を生み出して行ったわけです。

特に1960年代は日本映画が全体的に落ち目になっていた時期だったので、橋本忍の脚本作品は、大ヒットするし、評論家

から高い評価を受けることが多かったのですが、各映画会社とも橋本忍を取り合うような状況でした。橋本忍自身も仕事のオフアワーが来る前から興味がある原作にぶつかつたら、それを勝手にシナリオにしていって、話が来たらじゃこれどうかねと渡すようになってしまつたわけです。

橋本忍の脚本の特徴

橋本忍の脚本の大きな特徴は一言で表すと人間が理不尽な目に遭うということです。一つとしてハッピーエンドで終わる映画がない。デビュー作の「羅生門」からして、ある武士の夫婦が旅をしていたら、藪の中で多情丸という盗賊に襲われて奥さんの方は犯され夫の方は殺されてしまう。そこから謎解きが始まっていく映画です。理不尽から始まり、事件はほぼ解決しないまま終わるのです。「七人の侍」も野武士の集団が百姓たちの畑を荒らし、百姓が対抗するために用心棒として侍を雇うという理不尽な話です。橋本忍の出世作と言われている「真昼の暗黒」という映画は、実際の強盗殺人事件が題材になっており、まだ裁判中だった映画で、結審されていない段階で無実であると断定して検察批判しているかなり尖った作品でした。これも普通に通ってきた人間がいきなり冤罪を突きつけられる理不尽な話です。それから「私は貝になりたい」は戦時中の話で、人の良い床屋が徴兵されて実際の戦地で、上官の命令を逆らえない状況下で、外国人の捕虜を処刑しようとしたら傷を負わせてしまった。そのため、戦後に軍事裁判にかけられて死刑にあうという話です。「切腹」も自分の藩がつぶされて貧しさのあまり不幸になっていく人々の話ですし、「日本沈没」なんて日本が沈没する話です。からね。樋口真嗣監督で近年リメイクされましたけど、このときは沈没しなかったのです。

橋本忍は絶対そうということしません。それから「八甲田山」は、199名の軍人が冬の八甲田で雪中行軍をおこない亡くなってしまいう実際に起きた話をもとにした映画です。

私はそういう橋本忍の作風にとっても惹かれるものがあり、私自身も恵まれた人生じゃなかったの、ハッピーエンドの映画は好きでなかったのです。人間が苦しんでいく様を描いた橋本忍の映画にすごく惹かれるものがありました。橋本忍全体を取材するというのはこれまで行われていませんでしたので、私がやるしかないということ、[新潮45]という月刊誌に連載がはじまり、2012年の2月から2014年3月まで全九回約20時間インタビューしました。当時橋本さんはインタビューを始めた時94歳でしたが、それを感じさせないくらいお元気で語っていただきました。

インタビューの中で、キャリアのクライマックスになるだろうと捉えたのが松本清張との仕事でした。1960年に入った頃から1970年代の半ばぐらいまでが全盛期で、そこがまさに松本清張と一緒に仕事をしていった時期だったのです。具体的には、1958年「張込み」、それから1960年「黒い画集」あるサラリーマンの証言」、1961年「ゼロの焦点」、1965年「霧の旗」、1970年「影の車」、1974年「砂の器」の計六本です。

二人は相性が良かったと思います。橋本忍の脚本の世界を一言で言うと「理不尽」ですが、松本清張にもそれは言えるのです。どちらかという橋本忍の作品の理不尽は、何気なく日常を生きてきた人間が最悪に近いような形で酷い目にあう。例えば「日本沈没」における地震や「八甲田山」における吹雪。松本清張の作品はすこし違います。因果応報に近い話で普通に生きてきた庶民がちょっとした誘惑に駆られて身を滅ぼしていくという話

が多いのです。橋本忍の理不尽が、どうにもあらがえない理不尽だとすると、松本清張の理不尽は結構自業自得に近いような話です。理不尽という部分で一致しているので描きやすかったのです。

それからもう一つ脚色のスタイルが相性として合ったと言えます。橋本忍は原作を容赦なく変える人でした。ご自身は原作を牛に例えて、「牛が一頭いる。私はこれを毎日見に行く。それで急所が分かると鈍器のようなもので一撃で殺してしまおう。鋭利な刃物で頸動脈を切り、流れ出す血をバケツに受ける。原作の姿形はどうでもいい。欲しいのは生き血だけだ」と言っています。原作をトータルで一つの牛だとすると、橋本忍はそれを切つて血を受け取る。その血をもう一個自分の生き血という枠の中に入れる。血は同じだけでも、側は違うものになっているということなのです。そして、計六本、最も生き血を抜かれた人が松本清張だったのです。

実際、「霧の旗」と「影の車」は原作とあまり変わっていないですけど、それ以外の四本は結構変わっているのです。1958年の「張込み」が最初です。殺人犯を東京から佐賀に追つてきて、情婦だった女性の家に張り込みをするという話です。刑事が原作だと一人ですが、橋本さんはそれを脚本では二人にしたのです。確かに二人の方が自然だしそれでいいよと松本清張は認めてくれたのです。松本清張はそういうことが結構OKな人だということ、で、どんどん原作を変えていくことになるわけです。

続く「サラリーマンの証言」は、「証言」という『黒い画集』の中にある短編が原作です。あるサラリーマンが不倫をしていて、情事のとあと家に帰ろうとすると、近所の人に出会って挨拶をしてしまおう。ところがその近所の人殺人容疑で逮捕されてしまおう。逮捕された人はアリバイを証明するために、彼と挨拶し

ましたと裁判で言うけれど、主人公はそれを認めてしまおうと自分の不倫がばれてしまうので嘘の証言をしてしまおうという話です。原作の方は、最終的にはその愛人だった人間に実はもう一人恋人がいて関係をしゃべってしまつて、その恋人が警察にそのことを言うらしいぞという匂いの中で終わっていくのです。しかし、橋本忍はさらにもうひとつ理不尽な話を付け加えたのです。実は愛人の家に入り浸っている若者がいて殺されてしまおうのです。自分が起こした罪のために、どんどん悪くなっていくという脚本です。後半は全くのオリジナルの展開を作ったわけです。

それから「ゼロの焦点」は、戦後すぐのあの女性の悲劇の話です。アメリカ人相手に体売っていた女性がいて、その人が北陸の社長に嫁に取まり、過去を知っている人間を殺していくという話です。その展開自体は変わらないのですが、最後はかつて売春婦仲間だった女を殺してしまおうわけです。原作の方では口封じに殺すのです。これに橋本忍はもうひとつ悲劇を付け加えるわけです。それは何かという、殺そうとしたがお互いに苦勞して戦後生き抜いてきたことに気づいて、殺すことを諦めるわけです。そして自分は警察に出頭しようと思っていたら、殺す予定で入れた毒入りの酒を知らずにその女性は飲んでしまい死んでしまった。その犯人の持つ悲劇性がひとつ加わるように、犯人のキャラ、人間像を変えていったわけです。

「砂の器」における橋本忍の創作

そして、一番大きな脚色が行われたのが、「砂の器」という映画でした。後半のクライマックスシーンで約30分近くに渡って父と子がお遍路の恰好で全国を旅するという映像が有名ですね。親子が貧しい中で旅をする。父親はハンセン病を患っており、当時、差別さ

れていましたから行く先々で石をもって追われ、親子がずっと過酷の中で旅をしていく。しかし、このシーンは実は原作にはほとんど描かれていません。今西刑事という、映画では丹波哲郎が演じた警視庁の刑事が最後に捜査の報告をする中で、この親子が石川県から旅立ってどういう旅をしたのか分からないけれども最終的には島根県の仁多郡亀嵩にたどり着いたという報告をするだけです。ですから具体的にどういう旅をしたかは原作に全く描かれていないのです。この30分に及ぶ親子の旅は、すべて橋本忍の創作であり、しかもそれをクライマックスに持ってきたわけです。

今西刑事の語る犯人親子の感動のドラマ、殺しちやいけない人間を殺してしまつたという悲劇。そして、加藤剛演ずる犯人が作曲家としてオーケストラの指揮をしている。流れる音楽と親子の旅が合わさる形で感動的なシーンになっていく。多くの人が「砂の器」を見て泣いたと思います。けれども、これは原作に全くないオリジナルのクライマックスです。

実は私が中学生くらいの頃、初めて「砂の器」の映画をレンタルビデオで見た時、腹が立ちました。原作の犯人はすこくエゴイステイックでニヒルな男なのです。口封じのために殺人を犯していく。それを、刑事が推理して捜査して追い詰めていく話で、松本清張の原作が当時から好きでミステリー小説として楽しく読みました。親が「感動作ですごく泣ける映画だよ」とビデオを借りてきたのですが、原作しか知らなかったの何であの原作で泣けるのだろうと思いましたが、泣ける要素は無いのです。何でクールな原作をこんな甘ったれた話にしたのだろうと思いましたが、自分なりに苦勞したり、親が亡くなったたりなど経験していくと、あのシーンの尊さが分かってきて、今でも泣くことがありますね。

それでは何故、橋本忍が親子の旅を創作す

るに至ったかという話ですけども、1961年時点、新聞連載で「砂の器」を始めるので、「ゼロの焦点」「張込み」両方撮った野村芳太郎監督、橋本忍脚本で映画を作った欲しいと、松本清張から依頼が来ていたのです。橋本忍としても清張さんのミステリー小説ならさぞや凄い作品になるだろうと企画段階からOKを出していたのです。そして、新聞連載が重なっていき、松竹から切り抜きが送られてきて、それを読むことになったのです

が、その時橋本さんの感想はつまらないの一言で、これは出来ないという話になるわけです。けれども一応松竹に言われてシナリオハンティングを行います。シナリオハンティングとは、実際の映画の舞台になった場所や撮影をする場所に脚本家たちが行って脚本作りの参考にしていくという取材旅行です。この時、橋本忍のアシスタントとして付いていたのが、当時野村芳太郎監督の助監督だった山田洋次です。後年、「男はつらいよ」などをヒットさせていく人です。このとき現地へ向かう電車の中で、山田洋次に橋本さんが、「これちょっと面白くなかったから映画を止めたい」と言い出すのです。そして山田洋次が「ここまで我々は、松竹のお金を使ってきました。ここで映画を止めるのなら、私は松竹にいられなくなります。ぜひ続けてください。」と返答するのです。橋本忍によると、山田洋次がその瞬間、官僚みたくに見えたという事です。しょうがないから、二人で旅を続けて、実際の亀嵩とか行ったときに、橋本忍がふと言います。「そういえば、原作の最後に、親子が旅をしたっていうことが書いてあったよね。でも、どんな旅をしたか書かれていない。どんな旅だったかを、我々の手で書いてみようじゃないか。それで、映画にしよう。」と。橋本忍といえは、構成の人と言われるのですが、要するに起承転結を作っていく。どこがこの原作のポイントで、どこをど

う面白く組み立てれば映画として盛り上がるかっていうことを同時にパッと考える天才なのです。この時はまさにこの親子の旅というのを引つ張り出して膨らませて、これをメインに置けば映画として面白くなるに違いないと考えたわけです。そして、脚本づくりを臨んでいくのですが、クライマックスが浮かんから二週間程度で書けたらしいです。

親子の旅の構成の土台

橋本忍がクライマックスに親子の旅を持っていくときに、構成の土台にしたものは何かという、これが意外なのです。ほんとに俗人なのです。この映画のクライマックスは何を基にしたかっていうと競輪だということです。「砂の器」は自分の考える競輪そのものだといいことでした。競輪を実際やられた方は分かると思いますが、最初はずっとグルグル牽制し合って回って行って、最後の鐘がかんかん鳴ってみんなパニックと走り出して、特に(バンクが)すり鉢状になっていきますけど、この一番上から行って、グーツと降りてくるという走り方、まくりって言うらしいですけど、この一気のまくりで走りきっていくという話ですけど、このまくりを使ったのが「砂の器」だということです。序盤は原作通りある程度やって、だからグルグル回ってればよい。最後の一周の鐘が鳴ったところでまくりに入る。これが親子の旅だった。最後にこのまくりで走り切った。実際このまくりのやり方がうまくいっているわけなんです。親子の旅で最終的に感動に持っていくためにミステリーの部分を全部切ったのです。だから原作では、和賀英良よりも怪しい人が一人いて、彼が犯人ではないかとミステリーにもっていくというミステリー小説の基本的なやり方をしてるし、口封じのため第二第三の殺人もあります。しかし映画で

は第二第三の殺人も起きない。一人しか殺してないですね。そして最初の段階から加藤剛以外犯人はないと分かるのです。ミステリーとして成り立ってないです。橋本忍としてもミステリーとして面白くないと思っっていますから、そこを捨てて、今西刑事役の丹波哲郎と犯人役の加藤剛の二人のドラマだけにもって行って、最後にそれが親子の旅でぶつかり合うという構成にしたわけです。

そこがすごく上手なところで、一方で、新しい要素を加えている。何かと言えばその親子の旅の父親です。原作では父親は和賀英良が大人になって殺人事件が起きた段階では死んでいる設定になってるのです。映画では、ハンセン病の療養所で父親は生きていたという設定になっていて、最後に、加藤剛の作曲を演奏するオーケストラが盛り上がり、最高潮で親子の旅が終わって、そして丹波哲郎がその加藤嘉扮する父親のところに辿り着く。そして成長した息子の写真を見せるわけです。そしてここで、ついに会いたくてしょうがなかった息子の姿を見ることが出来た。元気に暮らしていることも分かった。父親としては嬉しくてしょうがないけれど、それと言ってしまったら自分の息子の罪が明らかになってしまうということで、こんな人知らないと言って泣きながら答える。親子の感動のドラマに作り替えていったわけです。

このまくりをグーツと盛り上げてお客さんをわっと盛り上げるために、橋本忍が考えたテクニクが何だったかという浄瑠璃なのです。橋本忍という人が面白いのは、父親が旅一座の興行主をやっていた関係で、大衆芸能とか古典芸能に詳しいのです。だから最終的に黒澤明と合わなくなっていくのです。黒澤明は外国の文学が好きなんです。ロシア文学のドストエフスキーやゴッリキーの話を映画化したりとか、ジョン・フォードの影響を受けたりとか、シエイクスピアの作品

を「蜘蛛の巣城」や「乱」という形で映画にしています。橋本忍はシエイクスピアが大嫌いです。近松門左衛門と浄瑠璃や歌舞伎が好きなんです。「砂の器」は浄瑠璃をもってきたということなのです。親子の旅の映像がまさに人形なのです。それから、今西刑事役丹波哲郎が、二人がなぜこういう旅をしたかと裏側の背景を捜査報告で語っていくのが義太夫の唸りなわけです。そして和賀作曲のオーケストラ音楽が、バックの三味線の音楽です。まずこの三つが合体して感動を生み出すというやり方は浄瑠璃そのものというところで、親子の旅を感動させるために様々な計算をして作ったのです。

その後、映像化を何度もされていますが、全部と言っていいぐらい橋本忍の作った構成になっています。構成原案という形で橋本忍と山田洋次でクレジットされているのです。構成が原作と同じような扱いになるのは珍しいことで、そのぐらい橋本忍が「砂の器」の中でおこなったことは、クリエイティブなことだったわけです。

橋本プロダクションと霧プロダクション

この「砂の器」を作る過程もかなりドラマチックなものがありました。「砂の器」の脚本を書き始めたのは「ゼロの焦点」が終わった少し後なので、1961、2年ぐらいです。ところが映画が公開されたのは1974年です。約10年以上経過しているわけです。何故このようなことが起きたかという、松竹の社長城戸四郎という方が松本清張のミステリーだということで企画を通したのです。ところが出来上がった脚本は、文字情報しかないのであんなに美しい映像が流れることを知りませんから、貧しい恰好した親子がただ旅していることが文字で長々と書いてあるだけで



す。これを見て城戸四郎がこんな当たるわけがないとお蔵にしたのです。橋本さん自身もそんなこだわりがなくて、脚本料をもらったし、忘れてしまったのです。それから約五年後、最愛のお父様の体調が悪化して故郷に呼ばれ、死の床についているお父さんのところへ行った時に、頭のところには脚本が二冊置いてあった。「切腹」と「砂の器」でした。お父様が橋本忍に「お前の書いた脚本は全然面白くない。だが面白いのが二つある。それがこの「切腹」と「砂の器」だ。「切腹」はもう映画になっている。「砂の器」を絶対映画化するべきだ。これは当たるぞ。」と言ったのですよ。

橋本忍本人に聞いたのですが、脚本書く基準は、どれだけ稼げるか、どれだけ名声に繋がるか、そしてどれだけ自分が興味を持てるかという三要素だと。帰宅して脚本読み直したら確かに当たりそうな要素があるということで、各会社にプレゼンテーションして回ります。しかし、当時、橋本忍は売れっ子の

脚本家であったにもかかわらず「砂の器」をやりたいと言ったら各社逃げる状況でした。

それで橋本忍の考えたのが、映画を自分で作るために橋本プロダクションというプロダクションを設立することでした。ずっと一緒にやってきて、「砂の器」の企画もやりたがっていた松竹の野村芳太郎監督とともに橋本プロダクションを設立して制作に乗り出していくわけですね。

そういう中で最初は東宝がやるうじゃなにかということになるのですが、野村芳太郎監督は橋本プロに参加しているけども、松竹の専属監督なので東宝で撮るとなると松竹を辞めないといけなくなってくる。松竹からしてもエースの監督ですから抜かれるのは困るということでごたごたがあった結果、最終的に、最初お蔵入りにした張本人である松竹がやるということになってくわけです。この映画は松竹がやると言っても制作母体は松竹じゃないわけです。配給をするのが松竹ですが、制作は橋本忍の橋本プロダクションです。親子の旅ができたのは橋本プロダクションという独立プロだからです。何故かということ、松竹でやっていたら労働協約もあった。橋本プロは独立プロですから橋本忍がOK出せばもうOKなのです。しかも親子の旅というのは、加藤嘉と子役の少年の俳優二人だけが必要で、スターもいませんからそんなに気を使う必要はない。カメラマンがちゃんと撮って、必要最低限のスタッフでいけばいいということでも十人ぐらいのスタッフで撮ることができ、何日までに取らないといけないといったものもないので、1年かけてその親子の旅をとることができた。これはそれまでの日本映画になかったことです。この親子の旅に対して、橋本忍はすごく力を入れてこれが勝負だということで、映画は取り終えた後、編集の人が大事なのですが、橋本忍は編集のやり方を勉強して親子の旅に関しては自

分でやったんですよ。しかも自分のプロダクションで自分が集めたお金で撮影していますから、普通だったら愛着もあるので、映像一つ一つが切りにくいのです。なぜか橋本忍はばつさり切って野村芳太郎が驚くぐらい短いシーンになっていったということとそのテンポを上げているわけですね。

それから、橋本さんは本当にすごいギャンブラーで、プロダクションを設立した時競輪を止めたのですが、それは映画というもつとすごいギャンブルを見つけたからです。できる限り負けそうな要素は全部削って勝てる要素に変えて、本当にわずかに残った偶然的勝負にかけるっていうことで、結構計算づくに様々なことをやって勝てる状況を徹底して作っていったということですよ。「砂の器」は原作者の認識も超えるぐらいの作品でした。

橋本忍と松本清張のコンビで作った映画は6作におよびますが、この「砂の器」が最後なんです。推論に近いのですが、このあと両者で作っていない大きな理由は、松本清張の霧プロダクション設立にあると思います。橋本忍はこの後1977年に八甲田山という映画を作ったのも大ヒットさせて、橋本プロは日本映画会を中心的な存在になっていくのですが、その時期に松本清張も霧プロダクションという映画の会社を設立するのです。この時、橋本さんは大反対するんですよ。あなたは小説家で映画のプロじゃないから映画を作るべきじゃないと。特に松本清張がやりたかったのは「黒地の絵」という、まさに小倉を舞台にした作品です。橋本さんが言うにはこの「黒地の絵」も橋本忍のもとに最初話に来たらしいです。しかし、これは映画にならないということでも橋本さんは断っているんですね。松本先生にはすごく思い入れの強い作品だし、最も松本清張作品を成功に導いた脚本家である橋本忍にお願いしたいというのがあったのだけど、プロダクションの創設、そ

れから、一番思い入れのある「黒地の絵」の脚本、それぞれに反対したというののもあって二人の間が疎遠になったのではないかと思えます。

特に、ずっと橋本忍の盟友としてやってきて、次の「八甲田山」もプロデューサーとして入った野村芳太郎が、1978年に橋本プロを離れて霧プロに参加しているんですね。このあとずっと野村芳太郎監督は松本清張原作の監督をしていくことになり、橋本忍とは仕事しないので、霧プロダクションを設立するのは両者の間を別つ大きなきっかけになったとは考え得ることであります。実際に橋本忍はこの後、「幻の湖」という映画を作った大こけしてしまっています。「幻の湖」というのは東宝創立50周年記念作品の結構な大作映画で、しかも橋本忍が、自分で監督し、脚本も書いて、橋本プロの第三作目、「砂の器」「八甲田山」につぐ作品で、ある程度話題作の可能性があるので、毎回その時期に公開される一押し映画がキネマ旬報の表紙になるのですが、これがなつてもおかしくなかったけれど、この時の表紙は霧プロの作った野村芳太郎監督の「疑惑」という映画なのです。霧プロは「疑惑」を「幻の湖」にぶつけてきているのですよ。実際「疑惑」が大ヒットして「幻の湖」はこけて終わるわけです。そういうことで、関係が悪くなつてしまったのだらうなということも考えうることです。

小学館が小説丸というウェブサイトを開設しており、「映像と小説の間に」という連載をもっています。そこで脚本家とか映画の制作者たちは原作をどれだけ変えていったか、その結果どれだけの名作が生まれたかというのを検証しています。その中で「砂の器」も取り上げていて、原作とどこが違うのか具体的に検証しておりますので読んでいただくとかわりやすいかなと思いますし、実際に原作を読んでいただくのもよいかと思います。

松本清張研究会 第48回研究発表会

令和6年12月7日(土)

東京学芸大学 S103教室 参加者40名

講演

再考・陸軍機密費事件——松本清張『昭和史発掘』の政治史的継承



講演者
小山 俊樹
帝京大学 教授

まり私も清張の作品を前提に踏まえた上で研究をしてきたという経緯があります。

私の専攻は日本近現代史です。文学とは異なるこの分野にも、松本清張という非常に巨大な作家は様々な影響をおよぼしています。私も清張の業績と関わりをいくつかが研究しています。私が今日お話しするテーマは、『昭和史発掘』の冒頭、清張が記念すべき第一作として書いた「陸軍機密費問題」を題材としています。これは大正時代末期に発覚した裏金疑惑事件です。一〇〇年経った今も同じようなことをやっているのですが…

『昭和史発掘』は後半の「二・二六事件」を扱った作品群が有名で、清張自身も、また担当編集者として史料収集にあたられた松本清張記念館名誉館長の藤井康栄さんにとっても思い入れの深い部分であろうと思います。ただ、私は『昭和史発掘』の前半部分にも魅力があり、今の時代に改めて再読する価値があると考えています。

私は四年前に『五・一五事件』という本を中公新書で出し、有難いことにサントリー学芸賞をいただきました。実はこの本の中で少し清張に触れています。『昭和史発掘』の幅の広さ、奥の深さを示すものだと思いますが、清張は森恪という人物に注目して五・一五事件を論じています。私は森の評伝をすでに著していたこともあり、清張の説を示して検討を行いました。つ

まり私も清張の作品を前提に踏まえた上で研究をしてきたという経緯があります。

清張の『昭和史発掘』はもちろん一面では文学です。しかし、私は先行する学術研究として取り上げる価値があると考えて、『昭和史発掘』にずっと着目してきました。その中でいづれしっかりと検証しなければいけないと思っていたのが、冒頭の「陸軍機密費問題」でした。私は最近では『中央公論』誌上に機密費の話を書いた『近代機密費史料集成』と題して、戦前の機密費に関する貴重な資料を出版するなど、これまで様々な機密費の研究を続けてきました。しかし戦前の機密費を考えたときに、「陸軍機密費問題」は避けて通れないのです。ところが、歴史学者による研究は非常に少なく、ほぼ皆無と言っている。従って、この事件を扱う場合には、やはり松本清張に頼るしかない。清張の作品は確かにノンフィクションなのですが、私は先行する研究として数えるに値すると考えています。そして、清張の問題意識を発展継承していきたい、と思っています。

『昭和史発掘』スタート時の背景 『現代史研究』の状況

清張自身は『昭和史発掘』を描くにあたって、歴史家、歴史研究者としてありたいと願っていたと思います。それは歴史的な史料に基づいて探究的に描こうという強い意思を強く感じるところからです。これは私たち歴史研究者とほぼ同じものだと思っています。ただ、やはり歴史研究と文学の間にはそれぞれのジャンルの約束事に違いがあります。

『昭和史発掘』と現代史研究の問題に関しては、二〇二三年に発行された『松本清張研究』（第二四号）の「今読む『昭和史発掘』」という対談記事で、保阪正康先生と加藤陽子先生という二人の近現代史専門家が余すところなく語っておられます。私はこれを読んで、松本清張の研究を理解してその意義を感じている専門家がこのだけおられると改めて認識したわけです。その対談の中から私が気になったポイントをご紹介します。と思っています。

まず最初に、保阪先生はこういうことを語っておられます。

「『昭和史発掘』の連載が始まったのは一九六四年です。僕は社会に出たばかりで掲載誌の『週刊文春』をだいたい毎号読んでいました。／それ以前に松本さんの『日本の黒い霧』（一九六〇年）があり、その後は読売新聞の長期連載『昭和史の天皇』が始まりました。これが一九六七年ですね。

『昭和二十年代にも『日本週報』『丸』『真相』などの雑誌が戦記物を取り上げたけど、明らかに嘘があったりキワモノ的な内容でした。それが、松本清張さんの仕事で整理されていった印象です。」という内容です。

つまり「まだ雑居状態だった（人）はどうかやっつき死んでいったのか」という視点をジャーナリズムの側から整理し始めたのが松本清張さんでした。その仕事は今にもつながる金字塔」と保阪先生は評価されているわけです。

これは『昭和史発掘』が一九六四年、今からびつたり六〇年前に時代に先駆けて、この同時代史に手を付けていたことの意義と重なるのだと思います。敗戦直後の真偽定まらぬ、しかし近い時代の歴史が、次第に評価が定まり、人々が知らなかった新しい事実が現われて、歴史になっていくその瞬間に、松本清張は同時代史に取り組んだ。そうした時代性は大事だと思えます。そして作者を含む多くの人が生きた記憶の強い時代について、清張は聞き書きや創作という文学的手法を前面に押し出すのではなく、歴史学的手法を用いて発掘するという選択をするわけです。

歴史学と同様の手法

『現代思想』という雑誌に、「松本清張の思想」という特集が組まれました（二〇〇五年）。この誌上で、成田龍一先生（近現代史研究者）と小森陽一氏（作家、漫画原作者）が「松本清張と歴史への欲望」というタイトルで対談を行っています。

「清張はあえて自分も歴史学と同様の手法をとっていることを強調して、自らの解釈の正統性を確保しようとして（して）いると言えます。とてもねじれた、入れ込んだ構造になっています。」と成田先生が話すと、これを受けて小森氏も「大衆小説の技法である聞き書きという手法を使いながら、決して神史小説家にならず、そうなることを拒絶し、断固として学問的な歴史家として立つということが『昭和史発掘』にはつきり現れているということですね。」と言われる。そして、成田先生は「はつきり現れているし、そのように『昭和史発掘』を読む必要がある」とまで言っています。

二人の対談は総じて清張に対しては批判的なトーンです。しかし、手法という意味で、清張は明らかに歴史学、つまり学問としての歴史の手法でチャレンジしようとしている。それは、専門家にとつては自明なことだったのです。

『同時代史』としての『昭和史発掘』

同じく特集「松本清張の思想」のなかで、近現代史研究者の有馬先生が次のように言っておられます。

「『昭和史発掘』は、松本清張にとつて文字通り同時代史発掘であったことを改めて確認したい。その『昭和史』は自明のように昭和戦前期であり、戦争を以て完結するものであった。」

「今日『昭和史発掘』を再読することは、そこに発掘された『事実』の吟味・評価もさることながら、一九六〇年代後半から七〇年代（に）かけて、松本清張という同時代人によって、戦争への分岐点としての二・二六事件という歴史観が、同時代史として書かれたという事態を、重層する時間の中に読むことでもある。」

要するに「同時代史」だということ、同時にこの『昭和史発掘』が驚くほど多くの人たちに読まれたという事実です。読む人もまた「同時代史」として、自分たちが生きた時代に分からなかった事実を清張が発掘してくれているという感覚を併せ持つて、まるで清張と併走するかのようにこの作品を愛読したのではないかと、思うわけですね。

的確な「つかむ力」

私が奨励研究の採択をいただいて、作業に取り組んでみて、はっきりと分かることが一つありました。それは、とんでもなく難しい作業だということです。現代史ですので資料が膨大です。大変な物量との戦いです。眠たくもなるし腰の方にも響きます。もう少し若い頃にやってくべきだったと個人的にはちよつと後悔しているところ、清張はそれを非常に得意とされたらいい。

「つかむ力」ということを加藤陽子先生が「今読む『昭和史発掘』」の中で言っておられます。「感心するのは、取材者である藤井さんが必死に探しあてた百ページも二百ページもあるような資料から、一番大事なところを掴む清張さんの眼力です。」その掴む力に驚きあきれました。

これ本場にそうなんですよ。正直私たちが現代の研究者ですからそんなことを日常的にやっているのですが、私たちでもあきれられるくらいに清張ってすごいなと思うわけですよ。改めて自分で資料を読んで、そして清張の本文に帰ると、しつかり的を得て要約されています。とんでもなくすごいなと、私も改めて今回実感したわけですね。

「松本清張の実像」という藤井康栄さんのエッセイに、こんなくだりがあります。「若い担当者が立てたこのテーマはもの見事に咀嚼され、集め

た資料は自在に活用されて、立派な原稿に仕上がってゆく」「苦勞して入手した資料を手渡し、こちらは余裕でお茶などいただきながら、没入して見入っている先生を眺めている時は、一種ゲーム感覚で楽しかった」というのです。そして「『ここだな』と指摘される的中率は百パーセントである。(中略)短時間でいとも簡単にクリアしてしまおうのは、余程の読み手である。脱帽と何度思ったことだろう」。

清張は、編集者をちよつと待たしている短時間に、膨大な資料を自分のものにしてしまおう。そして最も重要なところをズバツと読み取ってしまうのです。これは恐ろしい能力でありまして、考えてみれば、私もこの機密費のテーマを足かけ二十年ぐらいいつちラオツチラとやっているわけですが、清張は週刊誌連載でそれをやっている。しかもこれだけ書いているわけではない。それはもう想像を超える人だと実感してしまいました。

史料収集のこだわりと史料保存への無頓着

今、『昭和史発掘』を継承し発展させるには何が重要かと考えた時、私は歴史という分野であるからには、やはり史料が大事だと思うわけです。その史料収集については、松本清張自身も非常に強いこだわりを持っていました。



有馬先生にまた戻るのですが、有名な「二・二六事件秘録」という史料集を、先生は師匠にあたる伊藤隆先生とともに出版された。これに対して、松本清張は「わたしが六年前から持っている資料と根は一つである。東大の先生が『花』を待つような『新発見』ではないのである」と非常に機嫌を悪くされた。「同時代史」としてまだまだ史料が出てこない、しかし新史料は発掘していかなければいけない。そういった時代に清張は歴史家と

している調べて、こういう素晴らしい史料を発掘したのに、それを途中からさらわれたような気持ちになったのでしよう。だから単に史料の問題というよりも、自分も史料を基にした歴史家なんだと、ちゃんと見て欲しいという気持ちが大きかったのだと思います。ただ有馬先生の言うには、師匠の伊藤隆先生などは松本清張の史料に対する仕事を非常に高く評価してたんだよ、とお話されているのです。

清張のこの史料収集に対するこだわり、つまり新しい史料を発掘することへの情熱は、もちろん編集者として藤井康栄さんが手がけたということもありますが、すごいものがあつた。反面、史料を保存することには清張はかなり無頓着だったみたいですね。藤井さんのエッセイ「仕事の現場から」によると、「昭和史発掘」では前半の資料は全部捨てられてしまつて、無いのです。取材原稿を全部渡すのですが、終わると処分されてしまったのでしよう。途中から気がついて、後半私はコピーをとるようになるのですが、それまでの分は無いです。それがとても残念です。」と書いておられます。

私はこれを読んだときに「え?」と思つて、無いの?みたいな感じですね。無いとなると、これは大ごとですね。「昭和史発掘」の前半部分の手がかりがないかもしれないというのが、私の大変な関心事になつてくるわけですね。歴史を描くにあつた基礎となる史料の来歴と公開が、歴史研究者にとっては関心の大きな部分でもあるからです。

松本清張「陸軍機密費問題」再読

私たち歴史研究者としては、清張を先行研究としてとらえていくためにどうしたらいいのか。それを考えたときに、清張が注(学術的な史料の典拠や参照先など)をつけてくれなかったのだから、自分で注をつけるぐらいの気が張っているのか、徹底して検証する。これが最初の課題だと思つています。

この「陸軍機密費問題」は極めて複雑な事件です。大正十四年のことです。陸軍大将田中義

一、清張自身がもう若い人は知らんだろうと六〇年前に書いてあるので、今はもつと知らないとはいませんが、当時の大政党である政友会の総裁に陸軍大将でありながら就任した。こういう経歴の人もなかなか珍しいです。しかし、政党政治家というものはお金が膨大に必要です。田中大将はどこからともなく三百万円の資金を用意した。しかし軍内の反田中派が、これはどこから持ってきたのだと疑いを持ち、陸軍にだけ許されている、会計監査が入らない機密費ではないかと疑いをもつて、問題が浮上した。元陸軍の官房主計、三瓶俊治が田中を告発して、地検が捜査を開始して一大スキャンダルとなつていく。最終的に裏金は機密費ではなくて、シベリアでこっそり鹵獲した金塊ではないかとされたのですけれども、結局この事件の真相は明かされないうまま、担当検事の謎の死によつて闇に消えたわけでありました。

藤井さんの回想に「第一話に想定したのは田中義一の『陸軍機密費問題』である」とありまして、つまり、テーマの設定は清張ではなくて藤井さんだったわけですね。実はこの時期、清張は初めて行く「ヨーロッパ20日コース」に心を奪われて行く。「昭和史発掘」連載のことはほとんど相談しなかつたそうなんです。その間にテーマは藤井さんが考えることになつて、そこで出てきたのが機密費問題でした。

「作家は内発的な考えがないと乗れないのかつていうと、そうでもない。すごく自分の出したテーマに好意的に向き合つてくれて、そして資料を差し出すと、ぱつと構成して原稿になつて帰ってくる」と、藤井さんは振り返ります。「松本清張の残像」にあるように、基本は藤井さんがテーマを設定し、ときに史料搜索の時間を稼ぐため、清張が文字畑のテーマを選んで手持ちの史料で書くこともあつた。そうしたことを積み重ねて、この清張と藤井さんのコンビで、「昭和史発掘」は軌道に乗つていくわけですね。

陸軍機密費問題の話に戻ります。「松本清張の残像」で藤井さんは、機密費を最初のテーマに選ぶときに、松本清張が藤井さんの入手した

告発事件の裁判調書に強い関心を示している
と判断したと書いています。つまり、めつたに入
手できない史料を手に入れる。そうすると清
張は、本当に昭和史の発掘になるからと筆も進
む。こういう貴重な史料が作品の原動力になっ
ていったのです。私がこのテーマで採択を
いただいた時に、私一人では何もできませんの
で、古川君という助手の方にお手伝いをいただ
くことにしました。あらゆる史料から清張の文
章がどういふふう構成されているのかを、鋭
意分析していただいています。その結果の一部
を今紹介します。

『陸軍機密費問題』は非常に分量が多い作品
ですが、いくつかの大きな資料に基づいて巧み
に構成されています。最初に、『田中義一伝記』
は使っているのだろうと思います。田中義一が
亡くなった後に編纂が計画され、しかし戦争を
経て完結せず、ようやく一九六〇年に刊行され
たものです。この伝記中の内容がかなり引用さ
れていることが、古川君の調査によって明らか
になって参りました。さらに『田中義一伝記』に
は、田中が残した膨大な史料を中心とする『田
中義一関係文書』が裏付けとしてあります。現
在は山口県が持つて居る史料のマイクロフィル
ムも刊行されて、図書館等で見る事ができま
す。清張が『文書』まで参照したかどうかはま
だちょっと確認が取れていません。が、この『文
書』に載っているものが幾つか引用されている
ことは間違いないか、これからの課題です。
『文書』がマイクロフィルムに記録されたのは
一九六三年のことです。『伝記』の出たタイミン
グと史料が公開されたタイミングを考えると、
使用されていてもおかしくないと思います。

次に、『田中山梨西大將に関する軍事費問題
之真相』。これは同時代的な史料で、大正十五
年に出された怪文書(パンフレット)です。昭
和史の陸軍研究はこういったパンフレット類
が非常に重要だということはおそらく知られて
います。ここまで調べるのはなかなか大変なこ
とです。おそらく神田神保町に行ってもそう簡
単に手に入るものではないでしょう。ただこの

文書は、一九六四年の一月に刊行されたみずず
書房の『現代史資料』というシリーズの中に収
録されています。つまり『昭和史発掘』が出る
年の一月末です。『昭和史発掘』が夏ごろ出ます
から、出たばかりの史料を活字で参照した可能
性もあると言えます。

もう一つ、『陸軍機密費問題』の後半には、機
密費問題を帝国議会でぶち上げて、政治問題化
した中野正剛という九州の政治家が出てきま
す。中野は後に東条政権と対立して自決に追い
込まれます。この中野正剛が機密費問題を追求
して、それに対して政友会の側は反発として、
中野はロシアのスパイだとしてつちあげて糾弾
しました。その経緯がたくさんの史料で『昭和
史発掘』には書かれている。その経緯を記した
『中野正剛の生涯』という本が、やはり同じ年の
一月に刊行されているのです。

何が言いたいのかというと、『昭和史発掘』の
『陸軍機密費問題』というテーマは、世に出たば
かりの同時代史の史料をふんだんに使ってい
る。新しい発見が期待される新出の史料を継ぎ
合わせて構成することを考えて、設定されたの
ではないかと推測できるわけですね。『昭和史
発掘』が今でも長く息が続いて、歴史研究とし
ても読むに耐えるものであるのは、この時に出
た非常に質の良い史料をふんだんに使ってい
るからなのです。だからこそ、『陸軍機密費問
題』には未だに研究がなく、唯一清張のものが
文献として引かれる状態になっているのではな
いかと思うわけです。

こうした史料から清張の文章がどういふ
うに構成されているのかを分析していくため
に、先に申しましたが、この本文の典拠の史料
はこれですと表を作っています。ここで大事な
ことは、清張は史料を正確に一字一句写してい
るわけではないということ。要約もしてい
るし、原文との相違点もあります。史料ではこ
の人が話したことを、本文ではあの人にしてい
るとか、そういう小説的な組み換えもある程度
行われているのです。これは歴史学者はやって
いけないことですが、しかし文学としては普
通にあることで、その辺りの境界を確かめる上

でも、私はこういう地道な作業が必要なんだろ
うと感じます。歴史学の先行研究として清張を
高く評価するのであれば、そういった検証の作
業を経た上で、質の高い史料を使ったその視点
とか構成を評価していくべきではないでしょ
うか。

保阪正康先生はその点について非常に
シャープなまとめをしておられます。保阪先生
はもちろん現代史研究家ですから歴史の分野
から見た話ですけども、『昭和史発掘』の作品
群はいくつかのパターンに分類できると言わ
れます。

『昭和史発掘』にも、新しい資料が出てきて、
違う見方がされるようになったものもありま
す。例えば、五・一五事件は松本さんが書いた
ものは、やはりあの段階のもので、その後、血
盟団事件の資料や裁判資料も出てきました。『
昭和史発掘』は三つのパターンに分析でき
ます。①定本になってずっと残るもの。②視点
がシャープで、同時代のひとの見方を代弁する

もの。③今は新資料で違った見方がされている
が、書かれた時代の証言になっているもの。二・
二六事件は、やはり①の無限的に残るもの。五・
一五事件は③の時代の証言になるのではない
でしょうか。

これは保阪先生自身が『五・一五事件』の著
作で研究水準を刷新した方であることも重要
ですが、今後『昭和史発掘』の持つ様々な部分を
継承、発展していくには、こうした視点がすご
く大切なことは考えます。つまり、『昭和史
発掘』の持つ『同時代史』としての性格は踏ま
えた上で、六〇年経った今ではさらに新たな読
み方ができるのではないかと。一つにはその時代
の状況を映すノンフィクション作品として完
結したものとして扱う。またそれと並行して、
清張自身も目指した歴史学の学術研究として
継承していくには、常に新しい史料での検証を
加えていくことが必要です。この検証による再
考察と再評価が加えられることが、学術研究と
して清張を扱う条件になるものと思います。

研究発表

松本清張文学研究「法」の問題を中心に



発表者
孫平
長崎外国語大学
特別任用講師

清張と法・裁判事件

清張の法律や司法制度に対する強い関心に
は、父親の峯太郎から受けた影響も考える必要
があります。「私の中の日本人——松本峯太郎・
タニ」と『半生の記』という作品の中に、父親峯
太郎と法律との関係を語る記述が散見できま
す。実際独学で身につけた知識としての「法律」
や「政治知識」を自慢する峯太郎の姿は、近代
における「法律」や「裁判」の社会的な価値を物
語っています。清張にとって「法律」や「裁判」

が父親の姿や記憶と結びつくものだとなれば、
それは時流的な素材というにとどまらず、一人
の人間の生き方と不可分に結びつく次元で意
識されていたはず。そこに作家の関心の所
在もあつたと考えられます。

次、二点目は、小倉警察署留置事件です。
一九二九年の三月、つまり陪審制が施行された
翌年に、当時、八幡製鉄所の文学仲間が「戦旗」
というプロレタリア文学雑誌を持つていたこ
とから、清張も「アカの容疑」を受け、小倉警察
署に連行留置されて自宅も搜索されました。そ
して『半生の記』の中で、思想犯として目をつけ
られ、十数日に及ぶ拷問の上釈放された後も、
しばしば刑事が訪問したとあるので、刑事犯を
対象とする陪審制の問題は決して他人ごとで
はなかったのです。「留置所から家に戻ってみ

ると、「清張の「本」は、つまり文学に関する本は、法律と政治が好きで父親によって「ことごとく」焼かれてしまっていました。

この青年時代の留置事件は、清張にとって初めて文学、法律、司法権力の現実を考へさせる契機となり、また常に裁かれる側に物語の視点をおくようになったことの一つの大きな要因ではないでしょうか。清張の「法廷ミステリー」では、裁判官や弁護士との弁論場面はなく、逆に被告人の証言、心理が強調されています。「霧の旗」や「春梁」でも、被告人の近親者の視点から描かれています。

次は、清張の「現実の裁判事件への関心」です。清張は司法権や司法問題など幅広い領域に関心を示しています。一九五〇年代後半の松川事件では、清張も松川事件の審理を傍聴し、広津を応援する文章を数多く発表していました。そのあと一九七三年の四月、清張は佐野洋など、数多くの作家や評論家とともに、「再審えん罪事件全国連絡会」を結成し、冤罪事件を支援しました。さらに、憲法公布25周年の時、清張もあちこちで講演を行い、若者の憲法への関心を喚起しました。

「松川事件」の判決について清張は「黒い霧は晴れたか」の中で、次のように言っています。ある作家の持つ「作家は全ての事象を見直すことができるのだ」という特権意識を敏感に感じ取って、「作家」として現実の事件を扱う際に慎重な態度をとる必要性を訴えています。また、松川事件の判決は緻密な調査と論理的な審理によってではなく、「政治的」、「社会情勢」などの外部的な要素に後押しされた可能性が高いと認識しています。そして、「一年半待て」、「日本の黒い霧」、「昭和史発掘」、「証言の森」、「疑惑」などの作品においても、判決を誘導する外部的な要素を強調する考え方を読み取ることができます。

清張の「法廷ミステリー」の多様性

次に、清張の「法廷ミステリー」の特徴について見ていきます。清張の法律と法廷が焦点になる作品は大体四つに分類することができます。

まず、「法律の条文や法思想を素材とする作品」です。例えば、「一年半待て」。これは「一事不再理」という法律の裁判手続きに基づいています。また「カルネアデスの舟板」。二番目は「現実の事件を中核にする小説」。例えば、「日光中宮祠事件」や「上申書」など。三番目は「裁判事件をめぐる偽証、自白、冤罪の構造などの問題を扱うもの」です。例えば、「証言」、「霧の旗」、「春梁」、「奇妙な被告」など。四番目は「弁護士や検事が登場する作品」。

次に、清張が法や裁判事件を書くときの創作方法について簡単に説明します。清張は、松川事件の支援に携わっていた「広津の調査方法への評価」について、「被告の無罪を証明するため、その資料を法廷記録に限定し、その中から矛盾や不合理を抽出して真実の帰納を試みます。対して、自分の考察の方法は「周辺の考察」であると主張しました。清張は「作家」の特権を最大限に利用し、「法廷記録に出ないものや、単なる噂にすぎないもの」を生かし、事件の真相ではなく、事件を誘導する「政治的、社会情勢」から出発し、「推理」の方法で「周辺の考察」を行ったと考えられます。広津が排除した「想像と推認」を排除しない「周辺の考察」という方法は、清張の多様な「法廷ミステリー」に通有する基本的な性格となっています。

次に、「擬似体験としての法廷ミステリー」についてです。「霧の旗」は一九五九年の七月から六〇年の三月にかけて、「婦人公論」という女性誌に連載されました。連載期間中、多くの冤罪事件がマスコミによって報道されました。「霧の旗」を読む読者たちはおそらく冤罪事件の報道と小説を並行、あるいは前後して読むことになると考えられます。その読書体験から、小説での擬似体験を通して現実の事件を眺めることができる可能性が生じます。また、メディアを通して現実の冤罪事件報道に接してきた読者は、現実体験との偏差から小説を相対化するという楽しみを得るかもしれません。「霧の旗」という小説と冤罪事件を報道するメディアが相補的に働くような読みの体験がそこには存

在したと考えられます。

「霧の旗」連載前後に報道されていた非常に有名な冤罪事件の一つに、「徳島ラジコ商殺し」事件があります。この事件が作家の瀬戸内晴美が関心を持ちました。彼女は自家の瀬戸内晴美連載誌と同じ「婦人公論」に、「恐怖の判決」という、公正な裁判と真相の究明を訴える文章を書きました。「婦人公論」の読者投稿欄「婦人のひろば」に、「霧の旗」と「恐怖の判決」という投稿が載りました。「瀬戸内晴美さんの取行く恐ろしさに慄然としました。」この読者は、「霧の旗」における、女性主人公の大家弁護士に對する悪質な復讐や弁護士への理不尽な状況などには全く言及しなくて、桐子の兄正夫を、現実の冤罪事件「徳島ラジコ商殺し」事件で犯人とされた茂子と結びつけて、さらに自分自身の日常に結びつけて小説を受容しています。

清張の「法廷ミステリー」のもう一つの特徴は、「真実究明を拒否する法廷ミステリー」と言えます。「一年半待て」、「霧の旗」、「疑惑」、「証言の森」、「奇妙な被告」などの作品にその特徴がよく現れています。これらに共通するのは、真相を語る事が可能な人物の死や行方不明によって真相への追及が阻止され、裁判事件における真相の語りは「推理」の次元に止まってしまうということです。

「一年半待て」では、裁判で無実と判決された主人公須村さと子の恋人岡島がさと子のある言葉から、実はさと子が真犯人であることを推理して、その結論を当時裁判事件の判決にすぐ助言をしていた評論家の高森たき子だけに語りました。すなわち、この作品では犯罪事件の真相が明らかになっても、「一事不再理」という裁判審理の手続きの存在によって、再審されることはなく、真実は社会に公開されないままに閉じられてしまふのです。

次に、「霧の旗」も同じです。事件を語る事ができる弁護士は身分を失ってしまい、真相を知っている桐子も行方不明になることによつて、無実な人間が犠牲者となり、その真相が語られることも不可能となりました。

「法廷ミステリー」は、真相が究明されず真犯人も責任を逃れるという限界性を示していますが、真実／真相が語られない背後に様々な遠因／欲望がかえって浮上してくるのではないかと思います。現実の裁判事件は判決が下され、一応決着がつけられますが、これはあくまでも行政司法上の決着ですが、現実の事件の含む様々な問題点のすべてがそこで解決されるわけではありません。清張の作品世界はこうした解決されざる側面を取り上げるものです。清張の法や裁判事件を描く作品は真相が隠蔽されることにより様々な原因が遡及的に喚起されることになり、一つの裁判事件の真相を超えて、忘却された背後の様々な事象にまで射程が広がって、事件は改めて再構築されることとなります。こうして物語は一つの真相を超えた現実社会の真相を浮き彫りにする装置となるのです。

社会派推理小説との違いからみた、清張の「法廷ミステリー」の特徴

まず一番は、社会派推理小説の要素のほかに、事件発生後の審理過程、関係者の心理、被告人と証人の証言などの司法に関する要素も焦点化されることです。すなわち、法廷空間と社会空間と同時に備えています。その結果、裁判官や弁護士などの司法関係者の言葉から、被告人の告白、証人の証言、事件の審理までいろんな言説が入りまじることになります。

二番目は、社会派推理小説では事件に至る前の時間帯、すなわち過去が強調されるのに対して、法や裁判を描く小説では事件の予想外の真相及び事件が発生してから判決までの、現在及び判決後の将来の時間帯が描写の中心となっていることです。

三番目は、「犯人の動機に社会性をもたせる」以上、社会派推理小説には「動機」が必ず存在しますが、「法廷ミステリー」では動機が後景化され、あるいは「動機の不在」及び「真相解明の不可能」が設定されていることです。そのため、事件の解決にあたっては別の要因が要請されます。

西南女学院大学の学生グループが最優秀賞を受賞

「2024 グローカル観光国際学術大会」(令和6年9月9～10日・南海大学・韓国)で、西南女学院大学観光文化学科のグループが最優秀賞を受賞しました。

記念館にとっても、とても喜ばしい出来事でした。

ここに発表の概要を紹介します。

松本清張の文学的活動と北九州市との関わりについての考察

西南女学院大学 人文学部 観光文化学科 角谷尚久研究室

青木 琉南・井坂 心海・岩下 奈央・後藤 桜月・小林 茅・松本 さくら・森田 あゆ美

1 はじめに

本研究は、北九州市に位置する松本清張記念館における企画展の手伝いをきっかけに、松本清張の文学的活動とその歴史的背景、さらには北九州市との関わりについての詳細な考察を行うものである。松本清張の作品は日本の戦後社会や歴史的事件を題材にしており、韓国との関係も含めて多くの興味深い側面を持つ。

本研究の目的は、松本清張の文学的影響を探り、北九州市がどのように文学の発展に寄与しているかを明らかにすることである。

2 北九州市の概観

2・1 北九州市の概要

北九州市は、九州地方で福岡市に次ぐ第2の人口を誇る都市であり、その人口は約91万人である。市の経済は、製鉄、化学、窯業などの重工業に支えられてきた。特に製鉄業は、官営八幡製鐵所(現 日本製鉄株式会社)が象徴的であり、20世紀初頭からの日本の近代化において重要な役割を果たした。また、北九州市はかつて治安が悪くというイメージがあったが、近年では環

境モデル都市に選ばれ、次世代育成環境ランキングで13年連続1位となるなど、環境への配慮が進んでいる。このような都市の変遷が、文学的背景としても影響を与えていることは注目に値する。

2・2 文学的取り組み

北九州市には、松本清張記念館、漫画ミュージアム、文学館などの文学に関する施設がある。これらの施設は、文学作品の展示、研究、普及活動を通じて市民や観光客に文学を学ぶ機会を提供している。特に松本清張記念館は、彼の生涯と作品を詳しく紹介することで、清張の文学的功績を広める役割を果たしている。

3 松本清張の生涯と業績

3・1 生い立ちと主要作品

松本清張(1909年―1992年)は福岡県小倉市(現在の北九州市小倉北区)で生まれた。彼の代表作には「点と線」「砂の器」「黒革の手帖」などがあり、これらの作品は多くが映像化されている。彼の作品は社会問題や歴史的事件を題材にしており、鋭い観察眼と緻密なプロットで知られている。また、清張は積極的に海外

旅行や取材を行い、その経験を作品に反映させている。

3・2 菊池寛賞の受賞

松本清張記念館は2008年に菊池寛賞を受賞している。この賞は、公益財団法人日本文学振興会より、その年度に最も清新かつ創造的な業績をあげた個人や団体に贈られるものである。受賞理由には、水準の高い研究誌の刊行や多彩な企画展の開催などが挙げられる。

3・3 松本清張通りの命名

2010年3月15日に「都市計画道路大門木町線」の愛称として「清張通り」が命名された。この道路は松本清張記念館および彼の母校である清水小学校校区に隣接しており、西小倉駅から木町交差点までの1.8kmにわたる。この命名は、地元住民や関連団体の協議によって決定されたものであり、清張の功績を称えるものとなっている。



4 松本清張と韓国との関わり

4・1 韓国での影響と受容

松本清張の作品は1950年代から60年代にかけて韓国でも広く読まれた。日本語教育の影響で日本語に親しんだ韓国読者層が存在し、翻訳の必要性が生じる以前から広く受け入れられていた。韓国で最初に翻訳された松本清張作品は『或る「小倉日記」伝』であり、その後『ゼロの焦点』や『点と線』が続いた。

4・2 著作権と出版状況

1995年に韓国がWTOに加入するまで著作権の保護が不十分であり、松本清張の作品も多くの海賊版が存在した。しかし、著作権の定着後は健全な出版社による翻訳が行われ、2019年までに266冊の翻訳本が出版された。このような著作権の保護と翻訳活動の進展は、松本清張の作品が韓国でも広く受け入れられる一因となった。

5 北九州市における文学的発展の考察

5・1 森鷗外と松本清張

北九州市には松本清張以外にも「舞姫」などの作品で知られる森鷗外が小倉で勤務していた時期があり、小倉時代がモデルの作品も存在する。鷗外は小倉滞在中に講演会の開催や新聞・雑誌への寄稿を行い、当時のマスコミや市民に大きな影響を与えた。これにより、北九州市は工業都市としての発展とともに文学的にも発展し

てきたことが考えられる。

5・2 現在の課題とPR方法

北九州市の若い世代への認知度向上のためには、SNSを通じた情報発信や、小中学生向けの校外学習の実施が有効である。また、記念館内の展示の見直しや、文学作品をイメージしたグッズの販売なども、広く興味を引く手段となるだろう。具体的な提案として、以下のような方法が考えられる。

◎ SNSを通じた話題作り

* XやInstagramなどのプラットフォームを活用し、若い世代に訴求するコンテンツを発信する。

(※旧・Twitter)

◎ 校外学習の実施：地域の小中学校と連携し、松本清張記念館を訪れる校外学習プログラムを組む。

◎ 展示の見直し

館内の照明や文字サイズを調整し、より見やすく親しみやすい展示環境を整える。

◎ グッズの販売：松本清張の作品をモチーフにしたグッズ(例：マニキュアや文房具)を販売し、多様な層にアピールする。

6 結論

本研究では、松本清張の文学的活動と北九州市との関わりについて考察を行った。松本清張の作品は、日本と韓国の文学的・文化的関係を理解する上で重要な要素であり、北九州市の文学的発展にも大きな影響を与えている。今後は、さらに多くの世

代に松本清張の作品を知ってもらうための活動が求められる。

謝辞

(西南学院大学観光文化学科角谷尚久研究室) 松本清張氏(作品も含めて)との出会いによって、私たちが人生をより良く生きるためのヒントとして具体的な知恵、情熱、勇気等々、かけがえのない大切なことを、学ばせて頂きました。ことに、記念館館長 古賀厚志さま、学芸員スタッフの皆様、そして友の会会長加島巧先生には多大なる御教示を頂きました。厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- ◎ 北九州市立松本清張記念館「北九州市と松本清張 清張文学の原点」
2014年1月18日発行、41-43ページ(閲覧日:2024年6月23日)
- ◎ 特別企画展「松本清張と東アジアII 韓国・中国の清張(書店)と作家の歩いた(風景)」
2021年9月4日初版 3-8ページ(閲覧日:2024年6月23日)
- ◎ 松本清張と東アジア 一描かれた<東アジア・東南アジア>読まれる<清張>
2010年12月1日発行(閲覧日:2024年6月23日)
- ◎ 北九州市立松本清張記念館
<https://www.city.kitakyushu.lg.jp/page/culturecity/event/literature/seicyohigashiasia/>
(閲覧日:2024年6月26日)
- ◎ 北九州市観光情報サイト(閲覧日:2024年6月26日)
<https://www.gururich-kitaq.com/spot/ogai-mori-former-residence>
- ◎ et seq. 羽根ペンネイルポリッシュ(閲覧日:2024年6月29日)
https://etseq.jp/collections/osamu_dazai/products/od1948_no_longer_human

第28回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

- 対象** ① 松本清張の作品や人物を研究する活動
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンルは問いません。ただし。未発表に限り。個人又は団体も可。
- 内容** 入選者(団体)に100万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法** 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(全て様式は自由。ただし日本語)を令和8年3月31日までに応募してください。

詳しくは、ホームページをご覧ください。記念館までお問い合わせください。



音声ガイドのご案内

常設展示の音声ガイドとして、ポケット学芸員(展示ガイドアプリ)を導入しました。

アプリをダウンロード後、番号札のある場所で再生してもらいます。

ナレーションは、小倉西高等学校放送部の皆さんで

す。解説に続く、高校生のコメントもぜひお聞き逃しなく!



ポケット学芸員
アプリの
ダウンロード



Web版「情報ライブラリ」公開

「情報ライブラリ」は、館内限定のデータベースとして設置されたものですが、リニューアルとウェブ上での公開を望む声が多く聞かれるようになりました。ハード面でも、不具合や故障が相次ぎ、現在使用しているのは1台だけです。

そこで、新たにWeb版「情報ライブラリ」を再構築しました。当館ホームページからアクセスできますので、どうぞご活用ください!

Web版「情報ライブラリ」は「昭和の事件」「清張雑誌・記事一覧」「清張蔵書」で構成されています。今後も「主な収蔵品一覧」などを追加していく予定です。どうぞお楽しみに!



QRコードから
「清張蔵書」に
アクセスしよう!



当日は、まず、小倉西高校放送部がナレーションを行った当館展示室の音声ガイドをお2人に聞いていただき、その後、淑子さんに小倉西高校在籍時の思い出を語っていただきました。淑子さんは清張さんに一度も怒られたことがないそうです。生徒さん達は「清張さんは写真のイメージとは違って優しく穏やかな方だった」という感想をもったとのことでした。



渡邊淑子さん、松本陽一さんが来館
淑子さんの母校、福岡県立小倉西高等学校の在校生と懇談しました

小学館が 出版する漫画雑誌で、 当館が 紹介されました。

月刊『flowers』に連載中の、「グレさんぽ」(作者 グレゴリ青山さん)で当館が2月号(第126話)、3月号(第127話)の2回にわたり紹介されました。古賀館長や中川学芸担当主任も登場します。

作品は以下のサイト(ともに有料)で御覧いただけます。

「フラコミ like!」



URL <https://flowercomics.jp/title/444>

フラコミlikeグレさんぽ

検索

月刊『flowers』電子版

URL https://csbs.shogakukan.co.jp/book?comic_id=78991

小学館eコミックストア フラワーズ 電子版



検索



小学館eコミックストア

九州・小倉出身の社会派推理小説ブームを起こした作家といえど…!



(381)

「グレさんぽ」2月号(第126話)

先月号に続き、松本清張記念館からの渾身のレポートをどうぞ!



(291)

◆松本清張記念館 公式サイト→ <https://www.seicho-nm.jp>

「グレさんぽ」3月号(第127話)

三人の作家の文章修業



松本清張記念館友の会
会長 加島 巧

森村誠一(1933-2023)が『高層の死角』(1969)を書いたのは、文学賞に応募するためであった。めでたく第15回江戸川乱歩賞を受賞し、これがきっかけとなり推理小説作家としての道を歩みだすこととなるのだが…。江戸川乱歩賞受賞者は、受賞後に短篇を『小説現代』に発表することになっていた。受賞者は自動的に作品が掲載されるものと思っていた森村に、編集者は原稿を突き返し、書き直しを求める。6回目ようやく受け取ってもらい、それは「科学的管理法殺人事件」として『小説現代』(昭和44年12月号)に掲載された。この時の「短篇におけるシゴキ」はその後の短篇を書く際に大いに役に立ったと言い、「書くほどに袋小路に陥って行く焦燥感、物を書いて業を立てる者として一度ならず味わっておく必要がある」と述べている(「一推理読者から職業作家への道」(『ロマンの象牙細工』に所収))。担当編集者は、「よい物を書けば、必ず掲載する」と森村を励ました。

トラベルミステリー作家として有名な西村京太郎(1930-2022)は「歪んだ顔」で社会の底辺に暮らす人を描いたが、これで1963年に「第2回オール讀物推理小説新人賞」を受賞し、職業作家への道を歩み始めたと言って良いと思う。11年務めた人事院を退職して4年目のことだ。退職を母親に黙っていた西村は、朝に家を出て、上野

の図書館で昼過ぎまで原稿を書き、昼からは浅草で映画を見て、夕方に帰宅する生活を1年間続けた。作品を書いている間は懸賞に応募する連続だった。賞金10万円と時計を買った。この時計は質草として何度も活躍したそうだ。

『四つの終止符』(1964年)で聾者を描き、1965年に第11回江戸川乱歩賞を受賞した『天使の傷痕』では葉害に触れ、西村は社会派推理小説家の道を進むかのように思われた。『四つの終止符』が出版された翌年には、「蛇の目寿司事件」も起こり、当時の社会問題を先取りした作品と言える。初期の作品を読んでも、弱者の立場に寄りそう西村京太郎の姿が印象的だ。その姿勢は、トラベルミステリーのジャンルに進んでも忘れてはいなかった。『四つの終止符』から30年後の1994年に『十津川警部、沈黙の壁に挑む』には手話通訳士を登場させた。この小説は全日本ろうあ連盟の季刊誌「季刊みみ」に連載された作品だったのだ。

松本清張(1909-1992)は『週刊朝日』が募集する「百万人の小説」に「西郷札」で応募し、3等に入選した。1950年の事だ。木々高太郎に掲載誌を送ったことで『三田文学』との縁ができ、2つの作品が掲載され、その1つで芥川賞を受賞したが、それによって原稿依頼が殺到したわけではなかった。暫くは「勉強しながら書き、書きながら勉強」という時期であり、これがあとでどんなに役立ったかわからない」と当時のことを「あのこと」(『実感的人生論』)の中で述懐している。「依頼の来た短篇を一生懸命に書いていた」という家族からの話も最近直接耳にした。松本清張の短篇の文章のうまさの秘密を垣間見たような気がする。そして「点と線」と「眼の壁」の連載が始まり、松本清張は社会派推理小説家としての地位を確立していくのだ。

● 松本清張「生誕祭」

- 日 時 令和6年12月21日(土) 14:00~16:20
- 会 場 松本清張記念館 企画展示室(38名参加)
- 内 容
 - 開会・主催者挨拶
 - 来賓挨拶: 松本陽一氏、井上局長(都市ブランド創造局)
 - 西南女学院大学の学生さんによるプレゼン
 - 講演「松本清張2024」(友の会 加島会長)
 - パースデーケーキセレモニー、茶話会



松本陽一さん



ケーキセレモニー

友の会では、清張さんの誕生日(1909年12月21日)をお祝いする「生誕祭」を毎年開催しています。生誕115年となる今回は、ご長男の松本陽一さん、ご長女の渡邊淑子さんを特別ゲストにお迎えました。

陽一さんからは、生前の清張さんとのエピソードを交えながら心のこもったご挨拶をいただき、井上局長からは、貴重な資料をご寄贈いただいた松本家、記念館への友の会の支援に対して感謝の言葉が述べられました。

続いて、西南女学院大学の学生の方々から「松本清張と市の発展」と題して発表いただきました。(韓国のプレゼン大会で最優秀賞を受賞したプレゼンをご披露いただいたもの:10面と11面に受賞についての記事を掲載)

加島会長の「松本清張2024」と題した講演では、1年間の出来事を清張作品と関連づけて紹介し、パースデーケーキセレモニー、茶話会(古賀館長によるオカリナ演奏)と和やかな雰囲気の中で生誕祭が行われました。

なお、終了後は、陽一さん、淑子さんを囲んで当館のSEICHOカフェにて懇親会を開催しました。懇親会では、皆さんと談笑され、質問にも優しく丁寧に対応されるお二人の姿がとても印象的でした。(参加者:24名)

参加した方々からは「清張さんのお子さんと直接話ができ、一緒に写真も撮ってもらえてとても嬉しかった」「学生さんの発表が素晴らしい」「加島会長の講演を毎年楽しみにしている」「懇親会でお二人の素晴らしい人柄に触れ感激した」といった声をいただきました。皆様の心に残る生誕祭となったのではないかと思います。



会長挨拶

● 友の会 会員更新と新規会員募集のお知らせ ●

松本清張記念館友の会は、8月1日から翌7月31日までを1年間として、多彩な事業を実施しております。年会費は3,000円です。皆様のご入会をお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、
松本清張記念館友の会事務局まで
TEL. 093-582-2761



研究誌「松本清張研究」〜第二十六号発刊〜

特集 松本清張晩年の大作群

座談会

衰えぬ創作の炎

―担当編集者が語る作家の実像

木俣正剛・堤伸輔・齋藤陽子

司会 田中光子

論文

一九三三―三四年の「歴史地図」

―松本清張『神々の乱心』を読む

成田龍一

『赤い水河期』―葉書エイズ禍の近未来サスペンス

綾目広治

松本清張と文藝春秋と週刊文春

酒井 信

陰謀と観光 ―松本清張「霧の会議」を読む

山本幸正

特別寄稿

資料紹介 中島利一郎宛松本清張書簡・続

松本常彦

特別インタビュー

清張作品から読み解く、日米同盟の暗部

手嶋龍一

エッセイ

文学模擬裁判と松本清張の親和性

札埜和男

『砂の器』と『笑うマトリョーシカ』

早見和真

記念館研究ノート

二つの「玉腕記」―松本清張と井上靖(二)

中川里志



令和7年度
中学生・高校生

読書感想文コンクール

若年層に清張作品に親んでもらうとともに、表現力を学び、豊かな心を育む契機となればという思いから始めました。
新時代を切り開く若者達へ、探求の人・松本清張の精神の伝達を働きかけるものです。

- 応募対象 全国の中学生・高校生
- 課題図書 中学生・高校生ともに下記から一作品
 - 『球形の荒野』（『球形の荒野』上・下 文春文庫など）
 - 『遭難』（『黒い画集』新潮文庫など）
 - 『徳川家康』（『徳川家康』角川文庫、講談社火の鳥伝記文庫など）

■応募方法
中学生、高校生ともに1,200～2,000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募用紙はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■応募の注意

- ・参考にした文献や出典を明記し、引用文は「 」で囲むなどわかるように表記してください。
- ・AIによる生成物をほぼそのまま自己の成果物として応募・提出することは不適切または不正な行為です。

※詳しくは文部科学省「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン（Ver.2.0）（令和6年12月26日公表）」をご参照ください。
https://www.mext.go.jp/a_menu/other/mext_02412.html

- 応募締切 令和7年9月30日（火）※当日消印有効
- 選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。
- 発表
最優秀賞、優秀賞の受賞者には、11月中旬頃、本人と学校に通知し後日表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」およびホームページで発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

- 賞品（受賞人数等変更の場合もあります。）
 - 最優秀賞（1名）
 - 優秀賞（中学の部…1名）（高校の部…1名）
 - 佳作（中学の部…3名）（高校の部…3名）
- ※最優秀賞は中学の部、高校の部で各1回ずつの受賞と限らせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。すでに受賞した人からの応募作品が賞に該当する場合は〈特別賞〉として当館発行の「館報」掲載を予定しています。

● 応募先・問い合わせ ●

松本清張記念館 読書感想文コンクール係
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

北九州市立中央図書館とのコラボイベントを実施しました

北九州市立中央図書館主催の文化記念講演会において、当館の古賀館長と柳原学芸員が講演を行いました。当日は46名の方が参加されました。

古賀館長講演は、「人生100年時代～生涯現役でポジティブな清張さんの生きざまや考え方、人となりに学ぶ～」と題し、40歳過ぎてから世に出て、その後、さまざまな分野の作品にチャレンジし続けた清張さんの生きざまについて語りました。また、柳原学芸員は、「NO BOOK NO LIFE! な作家清張の爆誕秘話」と題し、清張さんのマル秘エピソードを紹介しました。最後に古賀館長が清張作品にちなんだオカリナを演奏し、皆さん真剣に耳を傾けておられました。



講演に行ってきました

期間: 2024年9月1日～2025年2月10日

1	9月 7日	北九州市立生涯学習総合センター(小倉北区) (小倉おもしろ歴史文化塾)
2	9月 10日	西日本総合展示場新館 (静電気学会全国大会)
3	10月 8日	松本清張記念館内SEICHO カフェ (観光案内ボランティア・若戸会)
4	10月 15日	葛原市民センター(葛原サロン)
5	10月 17日	松本清張記念館(日本絵手紙協会)
6	10月 19日	上の原公民館(上の原長生会)
7	11月 8日	リーガロイヤルホテル 3F (小倉中央ロータリークラブ)
8	11月 16日	北九州市立中央図書館(文化講演会)
9	1月 22日	若松区花野路集会所(花野路サロン)

編集後記

昨年4月に記念館に配属され、1年経過しました。開館記念講演会や生誕祭、研究誌の制作等、さまざまなイベントや業務に携わる中で、いまだ衰えぬ松本清張の人気を実感しております。今後も微力ながら松本清張の魅力発信に邁進してまいります。よろしく願い申し上げます。(Y.K)

朗読・ミュージック・おしゃべりサロン

毎月1回、古賀館長と地域の音楽家や朗読家などの有志が集まり、SEICHOカフェにて開催しています。

松本清張の作品に関連づけた楽曲の演奏や歌唱、朗読などを聞きながらのおしゃべりに多くの方が参加されました。



共通テストで松本清張がとりあげられました

令和7年1月18日、19日に実施された大学入学共通テストの科目「歴史総合、日本史探求」の大問6で、松本清張の作品等を素材とする問題が出題されました。

若者への松本清張の認知度が一気にあがることが予想され、当館として想定外の喜ばしい出来事でした。



イラスト:山藤 章二

編集・発行 松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
<https://www.seicho-mm.jp>
制作(株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 毎週月曜日(休日の場合は翌日)、年末年始(12/29～1/3)、館内整理日
- 観覧料 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円) 小学生/240円(190円) ※ ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩20分 西小倉駅から徒歩10分 小倉駅からバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車) 車: 北九州市都市高速 大手町ランプより5分

